

氏名	岩崎 真梨子
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 4597号
学位授与の日付	平成24年3月23日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	形容詞性接辞の意味変化に関する史的研究 —「-ばい」と「-らしい」—
学位論文審査委員	主査・教授 江口 泰生    教授 宮崎 和人 准教授 京 健治        教授 田仲 洋己

### 学位論文内容の要旨

岩崎真梨子氏の『形容詞性接辞の意味変化に関する史的研究 —「-ばい」と「-らしい」—』は3本の学術論文、4回の学会発表を元にして、序論・本論・結論の三部仕立てで構成されている。全体はA4版215頁に及ぶ力作である。本論は10章からなり、目次は以下のとおりである。

#### 序論

本論 / 第一章 概観 / 第二章 「-ばい」の意味用法と展開 / 第三章 「-ばい」の上接部に関する考察 / 第四章 「-ばい」の活用形 / 第五章 話者の推測を示す「-ばい」に関する考察 / 第六章 「-らしい」の意味用法の変遷 / 第七章 「-らしい」の活用形 / 第八章 「-らしい」の連体用法に関する考察 / 第九章 「-ばい」の意味変化 / 第十章 「-らしい」の意味変化 /

#### 結論

序論で、本論文の目的が、形容詞の一部であったポイ・ラシイが推量表現へと移行していく過程を明らかにするものであることが示される。本論は、一章から五章までがポイについて、六章から八章までがラシイについて、九章・十章でこれらをまとめ、最後に結論として締めくくる。

本論の内容は次のとおりである。ポイは江戸時代には「水っばい」「おこりっばい」のように形容詞の一部として用いられていたが、最近では「明日、どうも雨が降るっばい」のような推量表現に用いられるようになった。この意味用法の変化がどのようにして生じたのか、用例(3100あまりの実例)を書籍・雑誌などから収集し、徹底的な実証によって明らかにしようとした。次にラシイも中世においては「愛らしい」のように用いられていたが、「明日は雨らしい」のような推量表現として用いられるようになった。これについても用例(11100あまり)を収集して実証的にその過程を明らかにしようとした。

その結果、江戸時代には、もともと「水っばい飯」「おこりっばい男」のように、直接に知覚した、高い比率を示す表現だったものが、昭和になって「やくざっばい男」のように



れる。新たな用法が生ずる過程や歴史的な展開を明らかにするという点も従来の研究にはない、独創的な着眼点として評価できる。こうして得られた結論、もともと知覚による印象表現だったものが、視覚による判断へ推移したという過程そのものについては、十分に説得的であるという評価がなされた。論文の質や量、問題意識の明確さ、真摯に取り組む姿勢、記述の方法、導かれた結論は高い評価を得た。

一方で推論用法は連体形から生じたという部分については、事実として提出された用例には納得せざるをえないものの、なぜ連体形が先なのかという疑問に対しては、理論的な根拠が十分に示されていないようにも思われた。大変、興味深い現象だけに、今後、理論部分への構築をさらに行うべきであろう。理論的な根拠があって用例の意味や確からしさや解釈が保証されるという面もあるからである。しかし、これらも岩崎氏の実証的態度を好意的に受け止めたうえで、発展的に望まれたものであった。

さらに将来への展望として、ヨウダ・ミタイダなど他形式の検討、各形式が推量表現をどのように分担しているか、近代推量表現の歴史をどのように組み立てるか、ポイが文体的にどのような位置を占めているのかなど、今後の研究の進展を囑望する意見や論点が提示された。いずれも期待の現われと考えると良いと思われる。

審査は大変活発に行われ、さまざまな意見が提出されたが、全員が岩崎氏の学位論文の手堅い実証的な手法、実際の言語事実を基にして考察を廻らせる態度を好意的に評価した。また導かれた結論も十分に首肯できるものであった。

以上の審査の結果、博士（文学）の学位を認定することについて全員一致で合意した。